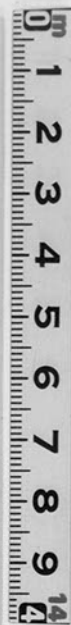


麦 聖

第 二 輯



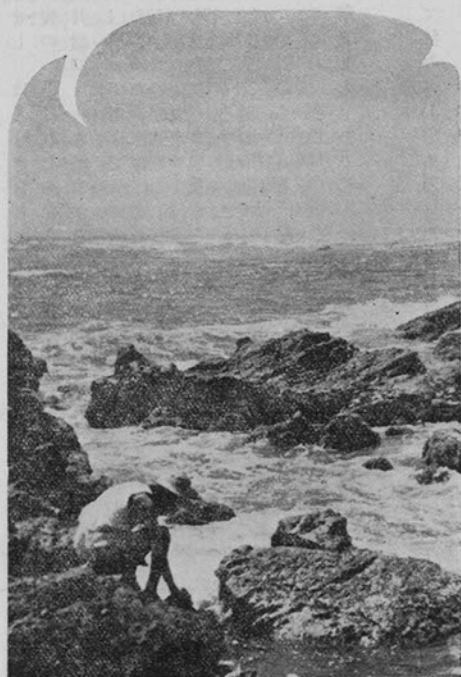
平 塚 モトル 柴 田 書 店



野

麥

第二輯



野麥 第二輯 執筆 者

柏木	渡邊	渡邊	小濱	小山	五十嵐	板垣
哲	武	何	牧	田	雄	喜
村	門	鳴	泉	滋	之	久
瀬	武	高	田	田	田	久
露	石	端	村	中	部	晚
草	光	巍	瀧	賢	君	霞
佐	聖	安	子	介	子	草
藤	青	齋	赤	今	松	野
清	柳	旗	羽	野	村	み
長	由	城	松	梅	清	ど
	美		堂	檀	美	り
	子			子	崎	
			鈴木	城	一	酒
			欣	芝	郎	井
			々	鳴		耕
			子			影
鈴木	野	石				
光	本	橋				
二	英	柴				
	尾	子				
		夫				

山河や 幾重

へたてふとほさく

れど 今も 身に親しもよおもほへば いとけなき日も やゝやゝに 遠
さかりゆき やゝやゝに うすれゆく なる ふるさとに けふのわが身ゆ うら
若く たらちねの母の ありませし はろけき日こそ 愛しけれ。 愛しき母の
老いさびて 年ごとに増す 白髪しら髪の あはれしらじら み雪とも おもほゆる時
や 故里の 山川いかに 関かん井けい嶺りやうゆ 吹ふきおろす風 肌へ刺し 夏井川なつゐがはかせし
のびきて 身を刺す冬を うつしみの 咽のど病びやうみ 咳せききて 咳せきき入れる ことしげけ
れば 醫師いしが 速はやき日や。 下げ髪かみながく 淡紅たんこう色の 兵へい兒に帯おしめし 乙女おんなわれ 醫師いし母
に添そひし 遠とほき日や。 下したげ髪かみながく 淡紅たんこう色の 兵へい兒に帯おしめし 乙女おんなわれ 醫師いし母
の手にて ひかるもの つぶりし まみに まさまさと 映うつじて 消きねば おのゝき
て 泣なかまく思おもへど たらちねの 母の むろ 手てが さへゐて つめたき 金かね屬ぞくの
くちびるに 濁にごるゝたまゆらなまぐさく 小指こさきばかりが 血ちに染そむよ。 いまふる
さにと 歌人かじんと きこゆる君きみの 醫師いしか。 いとけなき日も ふるさとと 遠とほき
かなたに 淡たんけれど 目にこそこれ 藤色ふじいろは、 涙なみだうかべて まがなしく ひら
きしまみを かすめたる 君きみの 着きませし ちりめんの 襦袢じゆばんの 袖そでの 薄うすき藤色ふじいろ。

反歌

肉塊にくくわいのをよびばかりをしめされて 笑みにし君も老いたまひけむ

つばくろ

高久 晩霞

小さきものゝ慌あわただしさよつばくろの 親おや仔こさ庭にわを囀ささやめぐる
仔こつばくろ電線でんせんに居ゐるおのおのに 餌えを運はく親おやの與ともへ誤あやまらず
うらぶれの友國境ゆうこくぎやうの奥おくに逝いくかなし 遺骨いこつも歸かへり得えずとふ
運命うんめいにさいなまれつつ友とも逝いきし 吾われが經へむ一ひとと生なま平へいらかなれや
常とこはまだわが寝ねさかりの曉あけを起おこされて見る夏なつの雲くもすがし
あかときの營やうみに鳴なく雀すずめ等の 寝足ねあしらはぬわが窓まどにかしまし
サボテンと百合はくげの大輪だいりん咲さく今朝けさは貧ひんしき庭にわも明るくありぬ
おほかたは降ふらじと吾われも言いひて悔くいぬ子こ等ら出でし後に雨あめしとど來きて
俄たちか雨打あめうちつ庭土にわどのいきれ香かは端居たんゐのわれにしばしを去さらず

八つ手

高 端 巍

寒さ退ひきて春はるとくのひる山里さんりの長閑ながいそにけぶる午後ごごのうらゝ日
朝風あさかぜにゆらくハツ手に片照かたてりつやがて日射ひしは縁えりにおよべり
わるびれもせで學藝會がくぎかいに立役たちやくを果はたせる吾兒わがこを雄々ゆうゆうしとも見みつ
亡なき人をひたに戀こひては中々なかなかに死しのたのしさを思おもふことあり
峯越かみこしに入い日ひさす見ゆ茅原ちのくはらの穂先ほのきりなびくは西風さいふうわたるかも
眼めさめては今日けふぞ良よき歌うたつくらんと勢いきなりひ心に床とこをはなるゝ

葛の葉

田部君子

誰を喰ふ虫もゐるとふ小女の厨言を苦笑ひるる
露草のうすむらさきを野あざみの深きにかへんおもひあるなり
黒目金らんちろとゐていささかのひけ目もあらぬ顔をしてゐる
夕松風空よりなぐり來し音のたちまちとほしくづ原をゆく
くづの葉の風山ひとつ七月のひかりの中に一瞬ただよふ
身をきそふ水にまかす螢火を心妬しくみる日となりぬ
星赤く暗き夜空の下にゐて戀かと如く東京をこふ
一步より踏みにじられしあへてしもふみにじられてゆかんとおもひぬ
われのみのしるかなしみはいはでこそ靜座して今日も千字文書く

そばから

佐藤清長

喜びの自づなしとて日を限り住む我が町に市制發布さる
相共に晴着嬉しき掌をのべて自活經濟を示せ平市
一筋の人の願ひはきくもよしとゞさりながら我れは一票(市議職二首)
一票の行使をまきてとりどりの糸はたぐるか我れはおびへり
咲き落ちて花もあきたよぼんやりと死ぬることなど思へぬにけり
我が後に先になりつゝしまらくは日に照らひつゝ蝶と歩めり

たまゆらの生命落して生れ來し汝は影かよ觸れて聲なし(姉死見出產)
相似たるものをつきつめ死なむと云ふ友よするくはならぬものかな

池

草野みどり

夕小波こまかく寄する池の面水隈にたまらふ丹つゝぢの花
柿若葉青う沈みぬ裏池に水すまし居ていよよ水澄む
晝深く水照りきらら此の池にひたすら泳ぐ水すましらは
杖ひきて祖母池の邊を歩み居りくまなく晴れし初夏の午后
黄あやめの蕾ふゝめるここの池水底に大き枇杷の葉沈めり
日に幾度池邊に立ちて見守れど鯉は泳がす水すましのみ
みなぎらふ薄にこり水陽に透きて石それゝに水の垢見ゆ
やはらかき柿の若葉はそれながら晴れあがりたる陽にきららし
柿若葉いや深みゆく濃緑の葉蔭にこゝみ雜草ひきにけり
六月のひろき青雲見てあればまぶた疲れぬあまり蒼きに

潮騒

伊藤弘道

枯萱の繁みの中にこもりゐて冬日あたたかく晝となりけり
蔭なす枯草の上にならび寝て潮騒の音をとほく聴きおり
やましきことの厭ふ父はもけふもまた人とあらがふ聲のつゞけり

「雪 國」抄

白 木 英 尾

山のスロープは
白い、白い葎の花
しんしんと
旅心をそめてゆくもの

明るい月のあかり
貝殻のやうに
ひかる女體のつやゝかさ！

唇は
一びきの蛭の輪となる

「いけない、いけない」

「わたしはそんな女ぢやない」
酔ひしれながら

しやんと坐つた女の妖しさ
——笑へなくなる

目さめれば

窓あかり 青く
女の寝顔をてらしてゐる
午前四時

x

遠く 國境は嵐だ！
ラヂオから流れる
はげしい……の意志表示——

いちめられ いちめられつゝ
あきらめの生活に馴れて幾年——
しみじみと
自分がいとほしくなる

じろり 三白眼をうごかすと
狐憑きのやうな面だ
武裝したころで
對ひあつてゐる

女 人 六 唱

蔓 珠 沙 華

「茶をすゝつても本を讀んでもさみしくてならぬ」君のたよりも今は古りけり（君子へ）
灰皿にすててのこりし烟のごと夜更けに思ゆ遠きふるさと（由美子へ）
白南風に光る青田のこの郷に歌をつくりて人はおませり（みどりへ）
白薔薇の清さにかよふまなざしをわれは忘れじ戀ならずとも（鏡子へ）
あまりにも母となる日の早かりきよき歌よめる美し君かも（時子へ）
紫陽花の花をかいえし銀バスのひと美しき七月の晴れ（濶子へ）

生 活 環 境 の 歌

城 芝 鳴

早苗田に影を落して水雲の退き行くなべに葉に光る露
友の家に垣根となせる蔓ばらを手折らんとせば花のこぼるゝ
耳につく海のどよみは宵毎に高まり行けり雨期近くして
ひそかにも命保ちて濱菜萐の林の中に聞く波の音
つきつめてたつき思へば捨鉢な心起りてともし灯を消す
うら忙し波のどよみを數へつゝ心落ちつけと息はき捨てつ
争はん心なくなりて對ひ居る今の言葉に口つぐみけり
屋根裏に何やらん蛾のはいたきて寝られぬ夜は心落ち居す
この春も蛇を食ひて己が病癒さんとせり命戀ほしきに

梅 雨

その他

田 中 賢 介

アカシヤの樹肌に冷ゆる朝の風かつこう鳥は聲太く啼く
おのづからゆるゝ若葉の光りさへ神經ふかく觸るを恐るゝ
降りつゞく入梅氣の雨のくられればわが生活を陰慘にする
わが生活いよいよくらし放膽の雜誌まくらに今日も寝て居り
あぶれたる顔をもちきて腰かくる土間の端居の冷え心地かな
粗壁の煤にまみれてひそみ居し蛾舞ひて居り梅雨くらき雨
歸へり來て子の幌蚊帳に添寝する心ゆとりや梅雨明けにけり
働らきて喰ふてむさぼる快眠にわが歳月はおのづからなる
乳首山乳のぞかせて晴れぬたりわが女友どちら母と皆なる
(君子、時子に)

雨 空

村 瀬 か つ み

葉櫻に雨の降る日は忙しくて古き日記を讀みてくらしぬ
降り足らぬ雨空暮れて蒸し暑き長屋に居りて南京虫取る

遍 路

吉 岡 獨 歩

何となく日蔭戀ふしく藤浪のさゆらぐ下に笠を脱ぐかな
しきり啼く山時鳥友として今日も遍路の旅を行くかな

若 葉 青 葉

野 本 多 霞 夫

今朝ことに友の寝顔に艶のあり病室の窓の若葉の氾濫
まかがよふ若葉の溪に山藤の色しづかなり郭公の啼く
新緑のそよぎ單衣の肌さはり開鑿道路唄ひつゝゆく
すいと來てひるがへりゆくつばくらめきらかに光る柿若葉風
げんげ咲く裏田の畦の朝じめり野良着の女鋤かつぎゆく
シヤボテンに煙草のけむり吐きかけてふてぶてと吾れの催促に慣る
ぐみの實の青葉ごもりに色づけば落つきおぼゆるさとの家
紅提灯聲をそろへて市民等の婉婉とゆく平の市街
出揃ひし麥の穂波の陽の光り絶えまなくゆれて凝視に堪へず
山水を樋に走らせて静かなるしぶきの蔭にしやがの花咲く
青葉風そよといて掛茶屋の床几にうまさ心太かな
草つけて馬ボク／＼とかるくゆく水田明りに燕とび交ふ
ほの暗く軒端に柿の花咲きぬこのごろとみに疲れおぼゆる
一杯のグラスの水に誘はれて聞きし花の瞬間を思ふ(水中花)
ぞつぷりと血を吸ひ足りし子の煩の蚊を打ち殺してなほ落つかず

柘 榴 の 花

梅雨曇り暗き葉蔭に緋と燃ゆる柘榴の花の保つ静かさ
鋭心をひそめて歸へる梅雨空に咲ける柘榴の花暗きかな
乗り越えて黒板扉に狂ひ咲く花柘榴なり眠くらめく

鯖

美崎一郎

海面にこだまかへして鳴り渡るサイレンはまた鯖の漁らし
青旗の大旗立つと叫びつゝ人等濱邊に走せ集ふなり
悲しきは人の性かも知れぬ追はれつゝ童ら鯖を持ち逃ぐるなり
鯖また鯖日につぐ鯖の中にゐて色づく麥を子等にきけり
子等にきく麥の色づき何となく心ひかれて野に出でにけり
野に來れば麥生はだに黄に染めり出で來て鯖の思ひ離れぬ
手も足も鯖の臭ひのしみたるか夕餉のひまも鯖の臭ひす
爪の間に刺さりし鯖の小さき骨にぶく痛むを耐へていねけり

瓜のむだ花

小山田滋

もの言はぬ金魚と吾と日曜のこの半日の樂しき安けさ
食卓のカットグラスの陰影を涼しがりつゝ夕餉にむかふ
今日もまた何をなしけむいたづらに瓜のむだ花土に落ちつぐ
浴衣がけ散歩の足に立ちどまりとりあげてゐし射的の鐵砲
ピンボンの音のはずみを公休のわがものにして吾まだ若き
使はれて使ひてこゝにいく年の勤め尊し桔梗の花



戀愛淨土

五十嵐雄之

エレンケーやペーベルを、又菊池寛
や杉山平助を引用して戀愛論を上下す
るには與えられた紙数が餘りに少ない
私は平素抱いてゐる戀愛淨土の信念か
ら蠅虫の節片の様な二三の感想を無規
律にならべてみる。羊頭狗肉のお叱り

を豫めお詫びしつゝ。

○
十六七年の昔過度の勉強が祟つたか
病を獲て病院に二ヶ月の日を過したこ
とがあるが、その或る日一番親しい友
が私の病床生活の徒然を慰めやうとて
買つてきて呉れた新刊書二冊、一つは
ペーベルの『婦人論』（山川菊榮譯）、
いま一つは當時讀書子の間に評判の高
かつた厨川白村の『戀愛論』であつた。
かうした問題に私の興味があらう
と推量しての友の選擇であつた。廻診

に來た若い主治醫が枕元にあつたこの
書物を見て「君も『Love is best』かと
ひやかし半分に言つたのが未だに耳の
底に残つてゐるが、戀愛に對する觀念
に限り當時の若き日の考へも冷厳な科
學の使徒となつて、十五年禿髮分別盛
りの今日の信念もあまり變りのないこ
とを面映く思ひながらも明白せざるを
得ない。自分でも時々考へることであ
るがあの謹嚴重厚な努力家、故濱口首
相の人格とその精進修養振りに崇敬を
感じてゐながら又一方にはあの勇敢に

して殉情的な戀愛の戰士有島武郎氏に對し限りない思慕と共鳴をおぼえる。自分の血管の中にはドンホアンの血が多分に流れてゐるのではないかと思はれる。だが私が讃美憧憬する戀愛は飽迄純真熱烈な純粹な本質的なものであることは敢て斷るまでもない。

○
ダンテのベアトリツチにいだいた戀愛はクラシカルな戀愛の典型としてあまりにも有名であるが、かうした熱烈な殉情的な美しい戀物語は詩や歌にも現はれてゐるといふ幾何あるか知れない。今は老いて大阪婦人基督教界の元老に納まつてゐる某女史もその若き日の頃同信の一異性を深く「思慕したが、彼には既に妻子があつて現實世界に於ては思ひを遂げ得べくもない事情を知つた。しかし彼に抱いた戀愛の感情を他の異性に捧げることが出来ず、遂々獨身を通して信仰や事業上に於て幾十年となく彼と行動を共にして殉情

を生かしたといはれてゐる。許婚の夫の面影を抱いて純潔に身を終えた妻、只一筋の愛に生きんと夫に殉じ妻に殉じた男女、かうした戀愛には實に善以上のもの道德以上をもの感ずる。人間美の極致であり、千萬長者の富でも王侯の榮譽でも購ひ得ない人間の崇嚴美であると私は信ずる。シンブソン夫人に寄せられた英前帝の意氣と純情とには私は衷心から無限の尊敬を捧げるものである。

○
世の所謂出世型の青年男女と稱せらるものの中には戀愛無感覺者即ち「戀愛つんぼ」が多いやうに思はれる。まことに教育者流の眼から見たら「戀愛つんぼ」は世話のやけない人々であらう。しかもその上理智の方面に優秀な頭脳でももつてゐたらそれこそ理想の青年と賞讃するであらう。私達も實際自分の子女は可及的遅く春の目醒めの來ることを希つてゐる。それが彼等を

して無事に學校教育を了らしめ世俗的幸運をもたらす上に便益が多い結果となるからである。しかし何時迄も「戀愛つんぼ」であれとは望まない。むしろ戀愛に對する正しい理解と飽迄純粋な強い情熱とをもつてゐてもらひたいと思ふ。帝都の真中で虚偽や形式の生活に満足する娘より滿蒙の荒地でも愛の淨土を喜ぶ娘であれかしと祈られる

○
戀愛を尊重するものを國民 無價値者或は良俗に對する害毒者と思惟する道學者輩もあるやうだが我々はかうした人達の心の貧しさを憐む。美術を文藝を演劇を目して、國家無用の長物と斷ずるのと大した運庭がないからである。ナボレオン、ゲーテ、ユーゴー或はイブセン等の如き甚だ活動的な性感を有し、戀愛に對する至純なる感情の所有者であつた。さらばこそ一朝有事の時には愛國の殉情家として奮ひ立つのである。只戀愛には多分の非謗や嫉

妬や迫害を伴ふことを常とする。戀愛に生きんとする時に榮達出世を犠牲にする例は珍らしくない。世紀の戀ウィンザー公の例は正にその尤なるものであらう。文壇の大常識家菊池寛氏はいつても「戀愛といふものを非常によいものとは思はない」とか「戀愛は一種の熱病なり」とか言つてゐる。そして結婚の爲めの戀愛には賛成するが戀愛の爲めの戀愛には不賛成の態度を示してゐる。社會の實情に疎い青年子女には如何にも親切な指針であらうが、神近市子氏もいつてゐるが本質的にはあまりに功利的打算的の戀愛觀ではあるまいか。勿論結婚といふ目標の存しない戀愛の場合には一層現在にも將來にも難關が豫想せらるゝことが多いことは覺悟してゐなければならぬ。又菊池氏の言葉を引くやうだが、氏の好きな言葉といふのに「考へて考へぬいて決行したことならその結果がどうあらうとも決して悔まない」といふのがあ

るが私も甚だ同感である。眞に戀愛に生きやうとする者はこの覺悟はしつかりと肝に刻んでおくべきであらう。私は現代の男女殊に女性が一朝戀に破れるとあまりに女々しい泣き言を訴へてゐる者が多いが少なからず不快なことを義憤を感じてゐる。

鯛

美崎 一郎

夜汽車に乗ると停車場毎に線路面近く赤紫色の妙な光を放つ信號燈が、強い光でもないのに、遠くからでも變に浮き上つて見える。あの光を見るといつも鯛の眼の上の特殊な色を思ひ出す獲れたばかりでビチビチと跳ね上つてゐる鯛等、光輝を帯びた實に鮮かな色をしてゐる。

茲に鯛といふのは、赤い色をした鯛

であるが、關東では他の鯛と區別して眞鯛とか赤鯛とか呼び、關西では本鯛といつてゐる様である。鯛と名のつくものはかなり多い。が、鯛の名にふさはしいものは眞鯛と黒鯛の二つであらう。同じ眞鯛の中でも、形、色、大きさに依つて種々名稱があり、値段も格段の相違がある。四百匁から六百匁位のもの中鯛といふのは人の知る通りで最も美味である。色は鮮かな程良い鯛はやはり刺身がうまい。生きてゐるのや餘り活の良いのは肉が硬くていけないが、適當な時間の立つたものを刺身にして食べる——殊に大きき五百匁内外、鮮紅色をした肉着きの良い中鯛の刺身を、そのまゝ食べるのは實にうまい。醤油や、わさび等はほんの一寸つける程度が良い。

花小鯛は魚類の花である。美しく着飾つた祭禮の稚兒さんを聯想する。四五年前には春から夏にかけて殆んど毎日釣りをしたが、魚の中で黒鯛程

狡猾なのは、まあ無い様である。従つて釣具にせよ釣り上げるこつにせよ、所謂太公望式では決して釣れない。のんびりと釣つてゐる様に見えても全神を針のやうに鋭くしてゐなければならぬ。右に左に、きりり、きりりと身を翻す銀鱗を次第に弱らして引き上げる氣持はまた、あいなめ釣等の比ではない。

菩提院と 袋中和尙

柏木 哲

大日輪が口の中に入ると夢みて胎内に宿つた——と云ふ日蓮上人の生ひ立ちに似かよつた話ではあるが、石城七瀬の海鳴り靜かに聞ゆる磐崎村大字岩ヶ岡のほとり、母なる人が空に向ひ白蓮華を吞むと夢みて孕まれた、と云ひ傳へられこののが後世名僧知識と仰が

る、袋中和尙その人である。

『代々佐藤と稱す』と云つたやうな事が文獻に残つてゐる處から觀れば滿更の百姓でも無かつたらしく、この意味に於て些か奇矯な對照ではあるが、彼の高僧日蓮が、假令最初の出はどうあつても梅陀羅（魚とり）の子なりとして謙遜大いに努めたのに較べると、その生ひ立ちに於て一日の差異があつた様にも思はれる。

和尙は胎内すでに父を喪つた。即ち母の手一つに育てられたのであるが、二歳にして氣貌雄偉他の小兒と甚しくそのゆき方を異にし、五歳で千字文を習ひ六歳にして詩書易經に通じたといふ驚異的の神童であつた。常に小童にあるまじき物おもひに耽り、その話に聞く亡き父の佛を偲んでは、他の兒ども達が嬉々として父の愛に抱擁さるゝに比べて、泌々その身の寂しさが考

へられて果てはこだはり多い俗世が憂とましくさへ思はるゝに至つた。

遂に七歳にして程近き西郷の能満寺に學び、十四歳にして薙髮納戒し矢目如來寺に於て嗜法——云々で和尙は僧籍に一步を染めた。その後折木なる成實寺の住職となつたが之れに満足すべきでない和尙は、補陀落山に三七日を剋して救世大士を念じ、或は會津の圓法法師によつて豪密の蘊奥を學び、或は福島月空に楞嚴圓覺の玄微を究め、遂に南北二京に遊んで性相及び儒典を習つた。

天正十一年（1583）淨土血脈論を著



はして鯉虎關浮土を以て寓宗となり云々、取り敢へず博士論文の通過と云つた格であらう。而も和尙は交通不便の當時に於て尙且つ遠遊の志やみ難いものがあり、將に長驅して明國に渡らんとしたのであつたが、いつの時代にも絶えない殊に頑冥な其の頃の役人に拒否され惜やその鵬翼を張ることが出来なかつた。

次いで琉球に渡つて大いに法を掲げたが、純朴愛すべき土民は靡然としてその徳風に歸依した。藩公また深く和尙を信じ桂林寺を創して開山第一世とした。慶長十六年（1611）歸國し洛東法林寺を建て太鼓を打つて樂み、翁然として和尙の法筵に参し隨喜渴仰の涙を流した。

寛永十六年（1639）正月二十一日山城國飯岡四万寺に寓し、端坐念佛巨木の崩るゝ如く大往生を遂げた。壽まさ

村の笑話

小濱 牧泉

九月になると待望の秋祭がある。何しろ露店が出て一寸近處に見かけない町の美しいお客さんの麗姿や近代的な感覚を享受出来るのは此の祭と三月の馬市ときりないのだから、その盛大さは、おつとり乙にすました町の祭の雰圍氣とは違つて眞底からすつかり有頂點になつて喜びにひたり切るのだ。老ひも若きも祭も近づくと胸をときめかせながら色々な楽しい計劃を眞剣に考へる、僕が此の村に來た頃は地芝居で

なくよそから頼んで來てやるやうになつてゐたが、もとは地芝居が盛んで顔が知れてゐるのでとても人氣だつたと言ふ。その頃のこれは實話だそうだが歌舞伎と言ふものについては殆ど知つてゐないが何でも「碇知盛」とか言つたものをやつた事があるそうだ。筋さへ知つてゐないが、とに角幕が進んで碇を頭上にかざしたかした新中納言平知盛が大見榮を切つて「新中納言」と名乗をあげて來てハタ！とつまつてしまつて、いつまで待つても次の言葉が出て來ない。「おやつ」と思つた別な役者が幕の後からそうつと覗いて見ると、餘程困つたらしい。顔を眞赤にしながら目玉ばかりうる／＼と、そこは俄か役者の悲しさ誤魔化すことも出来ずしきりに思ひ出さうとあせつてゐるらしい。見物はげげんな顔をしたりにや／＼したり、この奇妙な立すくみを眺めてゐる。これは大變と覗いた役者が幕のうしろから、平とどなつて

破綻

田村瀧子

佇んで居る自己の眼界の一つ一つが
薄霧の中に萎縮して行くかと思はれた。
黒々と横はる大地にがつちり脚を据えて
真直ぐにみつめて居た自分なのに
おや 前方は斜に外見えなない。
焦燥と自己憐愍の波は五體に荒れ狂ふ。
然し 世の中への眼がこうなのだ。
白い心に 靜かに眠つてゐた倅だつたが
泥だらけの運命の手が
べつたり 破綻の印を捺してから――

君と偕に歩んで來た望の道は
混性を持つた水にすら油を混ぜさせる

ことは出来なかつた。

君と偕に登つて來た筈の塔は
砂でつくられた 憧憬であつただけだ。

君と偕に臨見もふらず

描いては消し 描いては消して
愛情のラインを交らせ様と努めた――
それすら あゝ
パツシヨンの平行線であるとは。

ヒマの入つた陶器への憐愍と
崩れかゝつた壁の哀愁とが
入り亂れて 破綻の領域を争ふ。

君よ 生活の洋紙に

感情と理性とをタイプで打てと云ふのか。

君よ 妙案の苦さを押し通せと云ふのか。

デザインなしの戀愛から――

君よ 破綻への糸口が――。

は實も花もない。イワキとどなつたら
平を思ひ出すだらうと、磐城、磐城と
二聲どなつた。知盛に扮した人果然氣
が付いたと見えて大きくうなづき乍ら
莞じと微笑んで、然かも大音聲、
「新中納言小名濱の知盛」
と大見栄を切つたものだ。見物も他の
役者も期せずして爆笑をぶつばなした
と言ふ。御本人は綻やその他の事から
海ばかり考へてゐたとの事だ。それが
磐城と言はれたので小名濱とビンと來
てしまつたと言ふ。

此の話は眞偽の程は保證出来ないが
作り話としてもこの稚拙さは山奥のの
びのびした生活姿態が偲ばれて面白い
と思ふ。

一紅点描

『袖沼一好のことども』

松村 清

一紅は小學時代より文藝に親しんで

ゐたらしく、時事新報の『少年』に投
稿したりして、銀時計など貰つてゐた

○
大正六年平商を出て、宮の田村炭鑛
に就職した。以前からその下地のあつ
た僕と、それらしい彼と話合ふやうに
なり、親密度と共に短歌道へ深入りし
だした。平館の歸りに刑務所官舎の彼
の家に宿り翌日二人して出勤した。そ
の頃彼の母はロイマチスで臥たり起き
たりで、炊事などよく彼自身してゐた

○
大正七年春、平陽詩社同人となり、
『オアシス』へ毎號短歌を發表した。
又、双葉蝶二のペンネームで『いはら
き』へ數篇の短篇も發表してゐた。こ
の頃から酒に親しみ出した。『勘平』
といふおしやくに温くなつたのもこの
頃で『終局』と云ふ短篇が『いはらき』
に載つた。『破局』と云ふ原稿を僕が
燒棄して了つたので書き直したもので
ある。助川あたりに轉動になつたので
はるばる彼は逢ひに行つたりした。が



職した頃から作歌上に疑義が生じ僕と度々議論した。所謂口語歌が盛んになりだした頃である。結局『洋服を着けた人間は洋服を着た歌を詠むべきで——』衣冠束帯人の真似は恥辱である——轉向の篇で『自歌への告别』を書いた十二年初頭頃より詠み出し相當の自信をもつて磐城新聞、福島民友等へ寄せてゐた。

○ 休日によく二人で歩いた。十三年の五月須賀川に開かれた縣下短歌大會へ出席、天野多津雄、結城牧秋、渡部朝村其他縣下の歌人と知つた、この日須賀川で飲み過ぎ小野新町停りの汽車

高湯だつたか、土湯だかの湯壺に飛込んで死んだのであるが——後報で宮で本屋を営んでゐた野崎と云ふのが病死すべく帯同した藝妓に逃げられ一人心中したものゝ判つた——八月に桐生より歸省した彼と、いつばいのむべく町へ出掛けの際、僕が知つてゐた野崎が同道してゐたので驛へ出迎へてゐた柿沼に紹介した時の名刺を宿帳に利用した——のが大騒ぎの因となつたのだ。彼の老父母も非常に困惑した事件であつた。二三日して民友へ『間違はれた男の手紙』が載つてゐた。

○ その後は心臓を悪くし遂に歸平した。

◇ 生きの身の死を欲せねば肝心の心したぬみつとめやめたり。
◇ 肝心の心したぬみ病むからにつとめをやめて歸り來にけり。

○ 歸平したのち十一年平區裁判所に奉

遂に『終局』は來たのだつた。彼に驚めかしいエピソードはたつたこれ一件だけだ。二人の弟をつぎつぎに亡くし家庭的に寂しい彼であつたが、『戀』に關する限り妻君しを子さんを除いてただこれ一つと思ふ。約九年間親しくしてゐた間に現れたものうちで——
◇ さみしにわれは黙していや茂る足もとの草にどくだみを見たる。
◇ 見いでつるどくだみの花こそは夕じらむ世に忘れ得ざるも。
『終局』によつて生れた作である。

○ 大正十年春、桐生市の石炭商に就職した。もつともいゝ作の創れた頃、又停年に間近い老父より妻帯せよと盛んに強交渉のあつたのもこの頃——。國民文學に入社、松村英一氏に師事したのも桐生時代。

○ この年の九月一日福島各新聞に『柿沼一好が情死した』記事に吃驚した。

に乗り、夜深の山道を瓶酒を飲み乍ら川前まで歩き通した。『山峽の黎明』數十首の作が生れた。

○ 大正十四年暮愛妻しを子さんと久保町三三に愛の巢を営んだ。
◇ 一夜明けてあらたまりつる心かも朝とき空に妻ともの食す。

○ 大正十五年夏頃より釣に趣味を持ち特に夜釣朝釣に出掛けた。そんな無理が原因してか體を痛め、出たり休んだりの日が続いた。

○ 十月に入つてずーと寝て了つた。八幡小路の柴田さん宅に僕達の詩の會の



例會があつて大變工合がいゝと云ふので二人で出掛けた——その當時舊磐城球場南の本多さん宅に住んでゐた——その席上柴田さんが記念のため各自一句と云ふ譯で柿沼は

◇ 草ひよろり石ころりかな
と書いた。彼のどこか片隅に、ひよろり、ころりとしたものを今でも感じる次の例會で、彼の死去をもたらしした時、柴田さんが思ひ出されて、
フム——草ひよろり、石ころりかな
と長嘆息されたのが思ひ出される

○ 結婚するすこし前、老父母は相馬中村へ居を移されてゐた。十一月愈々病重く、老父が中村より來て連れ歸つたが、中村へゆけば友達もないし、再び平へ歸られないから中村へゆくの嫌やだ——と仲々應じなかつたと、しを子さん達にきかされた。永年住みなれ、友と親しんだ平町！に永遠に別れねばならないと云ふ豫感でもあつたの

か、その話を訊いて暗然とした氣持だつた。

○ 特に親しいと云ふ友もなかつたやうであるが、平町を退去するそれに未練はたしかに大きいものであつたと思ふ彼の作品の抄集したもの、百二十ある、時折、詠んで彼を思ふことしばしばである。二六、二八

附記

白木さんのおもとめになつたことからより遠く脱線してゐるかも知れませんが、又枚數も増加しまして、あしからず御願致します。

オンチ宣言

石橋 柴子

數日前の夜久し振りで尺八を吹いて

居ると、口の悪い友人が遊びに来て、暫く聞いて居たが、「音楽なんか断念しろ」と云ふ。「何是だ」と問ふと「君は音痴だから駄目だ」ときた。其奴の説明に依ると音痴とは色盲と同じく、個々の音律は解せるが、連続する数個の音律や重つた複雑な音律は何が何だかわからなくなり何れも一様に聞えるのだそう。僕も其れを僕の唄が立派に證據立てゝ居ると云ふのが癪にさわつたが考へると僕はとも音痴らしい小鳥の聲帯は人間のそれよりもつと奥にあるので、あんな張りのある啼音が出るのだそうだが、僕のは人並より以上に上部に位するの、又は少々部厚に出来て居るのか、兎に角高い音を出のに非常に骨が折れる、音断は唄を歌ふ必要もないのであまり苦にならぬが、宴會等になると全く生きた心地がしない時がある。隠し藝が廻り廻つて僕の番になる、何んと云つても許されない「石山荷」とか何とか、わい

／＼はやされて、やつと意を決する。只さへ出ない聲がアルコールの爲にいよ／＼喉にからまる。氣どるわけではないが正に冷汗三斗の思ひだ。こんな時はつく／＼親達が恨めしくなる。何故もう少し唄の歌へる子に産まなかつたかと。

何時か「これでも小學校の時は唱歌は甲を貰つたんだぞ」と見栄を切つたら「先生が間違つたのだらう」と大笑された。唱歌の甲は僕の母も驚いたらしい。父兄會の時に先生に御伺を立てた處、その先生が實にうれしい先生で「唱歌はあまり上手ではありませんが眞面目に歌ふので甲をあげました」と云つたそう。其の後先生が替つて新しい先生になり、學藝會の時に甲を貰つた五人ばかりが唱歌をやる事になつた。僕も其の中の一人だつたが練習の時先生に頸をひねられて遂に僕一人オミットされてしまつた。

人に唄の事で冷やかされると甚だ好

い氣持はしないが、僕自身それにこだわつて居る事は事實だ。
或る階級の半島人は夜戸外に寝る習慣があるそうだが、それには祖父三代の修業が要ると云ふ。その意味に於て僕も子孫の爲に美聲のフラウを持ちたいと思つてゐる。

或る女

野本多霞夫

「今日はひまなでせう、ゆつくりしてなさいね。あたし一寸そこまで行つてくるから」
「どこへ行くんだい」
「おまわり」
「おまわり？」
「けふおついたちぢやないの」
「へえ」
「ねえ、だからまつてね」

女は障子をしめてでて行つた。おつたちでおまわりか……私は柱によりかゝつて、湯上りのタバコをくゆらしながら、おまわりなどに行くしほらしい女のことを、一寸センチな気分になつて考へてゐた。やがて女は卵を四つ五つもつて入つてきた。

「さびしかつた」

「ふん、戀人のやうな氣でいやがる」

「そうよ……卵、外で買つて來たの、一ついくらかあてゝみない」

「いやに家庭的だなあ」

「いま半熟にしてあげるわ」

女は卵をやかんの中にそつと、一つづゝ入れた。そして傍へよつて來た。

「なんの本讀んでんの」

「……」

「みせてよ」

「つまらないよ、繪がないから」

「詩？ うた？ これ」

「うん、うただよ」

「あたし、うたすき、これでも。ーう

たはどんなのがいゝの？」

「いいのがいゝんだよ、女優だつて同じよ、顔がよくて藝があり――描つて

いるのがスターよ」

「でもどれがいゝんだかわからないわ好きさひはあるけど」

「そうさ、誰だつて好きさひはあるさでもいいのは誰が見てもいいよ、田中

絹代でも高杉早苗でも」

「それはそうね」

「半熟がたくなつちまふぜ」

「あつ、忘れてた」

女はとびおきてやかんから卵をすくつた。

「あんたみたい面白くて、さつぱりした方みたことないわ」

「そんなにおだてたつてもう來やしないから」

「こないだつていいや……けどさびしいなあ、いつべんきりぢや」

私は、一寸すきになれそうな氣がした。女はこつ／＼卵をたたいて、むき

乍ら「い

つべんき

りはさび

しからず

や」とい

つた。

私はあ

の君江と

いつた女

をいまだ

に忘れな



三度目に逢つた時君江は、ほかへ行くかも知れない、おかみと喧嘩ばかりするのあたしひとりきりよいつた。四度目に行つたら、もう君江はゐなかつた。一寸私はさびしかつた。君江はまげにゆつたら似合ふ女だと私は思つてゐる。

私の日記

鈴木 光二

○月○日

けふの引越したと云ふのに、母や妹が手廻しよく、家財道具を取り片づけてゐたので案外早く済んだ。南向きの三疊間を『自分の部屋』に取つてから、文机や本箱等をさしあたり必要なものを並べたてると、やうやくほつとしたやうな氣持になつた。

俗に『引越し貧乏』と云ふが家賃も安く日向きもいい家となると誰でもがねらつてゐる處なので、なか／＼見つかるものではない。それでも母の奔走によつてやつとこの家を見つけたのだ——『まあしばらくゐて、何處かにいゝ家でも見つけたらまた引越さう』——これが借家人根性と云ふのかも知れない。

○月○日

七月の陽が朝からちり／＼と照つてゐるので、停車場に馳けつた時はワ

イシャツが汗でぐつしより濡れてしまつた。四倉驛から自動車で白岩へ——更に一行は警務署の人達の案内で約半みち余新ハイキングコースを辿りながら、玉山鎮泉に着いた頃はもう晝すぎであつた。こゝが今日のコースの終點である。

日焼けしたみんなの顔にはホッ！と安堵の色が浮んだ。

一風呂浴びて、風通しのよい座敷に腹んばいになり乍ら吸ふタバコの味はなんとも云へない。浴衣に寛いだ連中は、頼りに冷ビールを傾けながら『ハイキングの話』に花を咲かせてゐる。どこかで時々河鹿の聲がする。靜かな湯治場の午さがりである。

○月○日

目をさました時はもう九時過ぎ、夜更しの目がチク／＼痛い。K君からしばらく振りで便りが來たので朝めしとも、晝めしともつかないやつ／＼を済ましてからすぐ返事のペンを取る。最

初は八錢位の手紙を出さうと書き出したんだが、途中で嫌になつたので早々に切り上げてしまつた。

午後から石坂洋次郎の『若い人』を読む。氣忙しい仕事に追はれて、しばらく讀まなかつた小説だけに、豫定の仕事もすつぽかして夕刻まで讀み續けてしまつた。

○月○日

けふから『新聞編輯日誌』を書く。漫然とたゞ機械的に動いて來た過去のことをふり返つて見ると全く情けなくなる。この日誌によつて幾分でも自分の個性を延ばしてゆくことが出來たらどんなに嬉しいことか！ しばらく打ち沈んでゐた自分の感情がこの頃またビク／＼動き出して來た。



案山子の賦 (民謡)

小濱 牧泉

大手廣げて

へへのもへち

ぐつと大見葉切つたとて

所詮案山子は 田圃の道化

その日その日を 泣き笑ひ。

眞實一途に

暮して生きて

案山子後生樂願ふても

烏あ朝晩

雀は日中

焚をかけたたりつついたり

夜風冷へびへ

素肌にしみて

ふつと佗びしくなつたとて

この世あの世と 嘆く案山子

所詮お前は道化者。

縁結び地藏 (馬子唄として)

青葉がくれに峠はヨウ

驟雨しと／＼濡れるとヨウ

小荷駄引き／＼太助はヨウ

村を捨てると泣いたとヨウ

花嫁衣裳を亂してヨウ

お吉は後を追つたとヨウ

峠で二人は濡れたとヨウ

びんの毛はらりとほつてとヨウ

峠の地藏が死ぬたとヨウ

梁のしごきを切つたとヨウ

晴れて二人は添つたとヨウ

地藏にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

地蔵にお詣り殖へたとヨウ

わが愛誦する俳句

○渡邊 何鳴

水着の娘ふくらむ所ふくらめり
夏来るしろき乳房は神のもの

紫竹
東勝女

○村瀬 露草

春の山ひと日巡りて異状なし
夏の雲黄なる蝶々落しけり

雪山
かな女

○石橋 柴子

ブラタナス夜も緑なる夏来り
向日葵の空かやけり波の群

彼郷
秋櫻子

○酒井 耕影

青嵐潮の影れを漏りけり
佛法僧啼くや深山の寺鐘

不明

○赤羽 松堂

いざよひはわづかに宵のはじめ哉
さみだれや大河を前に家に二軒

芭蕉
蕪村

○武石 光聖

牡丹剪る心定めて立ちにけり
立春の飯吹き上る籠かな

瓦全
九品太

○渡邊 武門

人殺すわれかも知らず飛ぶ蟬
風邪の妻子にもよそ／＼しくなりぬ

普羅
世壽

○安齋 旗城

荒海や佐渡に横たふ天の川
夏草やつはものどもの夢のあと

芭蕉
同

うつつむき

青柳由美子

草の香りも蛙の聲も

みんなはの甘き溜息の記録

あの唄を忍びつゝ歩いた露の小路

吹雪の夜も雨の音も

みんなベンのみ知つてます

濡れて行つた港の街

月の砂丘も波のさゝやきも

みんな蒼白き顔です

なぎさにきざんだ足の跡

うつむきてあてもなく……

暗い夜道はついでる

闇の中に

憶ひ出の人が明滅して居る

爪先が泥で眞黒だらう

百姓のうた

箱崎半吾

むらさきの茄子を、ちよいと、もぎつて
朝の土を歩いてゆくと

呼ぶよ、呼ぶよ、土は、生きてゐるんだ

あゝ！ だから だから

百姓はいゝと思ふんだ

世の中の燈火が、騒音の中に消え去つても

萎れる田圃はあかるいよ

あゝ！ だから だから

百姓はいゝと思ふんだ

夕映えがあかあかとして

仰ぎみる山は大きいよ

あしたも天気だなア

地上にしつかり立つてゐるんだ

あゝ！ だから だから

百姓はいゝと思ふんだ

穿つ者

魚井川潮

筋骨通ましく切端を鑿孔するドリルの偉力！

詰め込む導火線にパチ／＼火が點ぜられると

「オーイ！ 破破ダア」

かけ聲は炭層にこだましひろがり

やがて、ボーン／＼と五つ六つ続け様に

あたりこたまするダイナマイト

突如坑内に起る歓聲

崩れ落ちる黒ダイヤの堆積

それを鶴嘴で穿ち、炭車に積み込む汗の肉體

おゝ、平和の戦士、

地の勇者よ、

これぞ導きわれらの姿――

旅の劇場にて

赤井嶺男

胸々した小娘のカチューシャと

貴公子ネフリユードとの對話に

『あれカチューシャよあの音は

氷が融けて流るる音ぞ』

彼女が女になつた宵

驪な月が沖天に煙つて

春の夜の法悦がくまなく漂ひ

氷のかけて流るる音が断続し

半歳鎖した氷が融けて

オホーツクのホリゾンが紫に霞む頃

ごとりとごとりと觸れ合ひ乍ら

晝となく夜となく海へ出る

曾てそこに住んだ私は

門司の劇場に松井須磨子と中井啓

そんな事はすっかり忘れて

温かきベチカのほとり

サモワルの沸る傍ら

北露西亞の夜の氣分を

沁々と味ふのでした

(大正五年門司にて)

青 嵐

渡 邊 何 鳴

青あらし朴の葉すべてひるがへり
青あらし過ぎて薊に蝶湧けり
釣橋を過ぎ青嵐吹く洞へ
青あらし展望臺を吹きめぐる
青あらし霧をいざなひ吹きめぐる

篠の子集

安 齋 旗 城

葉漏れ日に篠の子高き育ち哉
篠の子やこゝ山路の湿りおち
篠の子を踏んで裾野の露營かな
篠の子や瓦焼場の朝の雨
篠の子やこゝひとしげき外厠

田 植

鈴 木 欣 々 子

ほたる生れ田植ま近き野となれり
かじか鳴く川が暖かれて田植來ぬ
朝焼の雲ながれつぐ早苗とる
植ゑし田のみぎり幾すじ見て歸る

梅 雨

村 瀬 露 草

梅雨深き選炭場を灯しけり
灯して梅雨のバンドに母炭拾ふ
球場の梅雨は暮れ時早くせん
入梅の球場早く暮れてゆく
コーチアは梅雨の暮時悲しめり
霞切に曇る入海に網をさす

雲の峰

酒井耕影

山ひだの北へ走りて雲の峰
市の果てを曲りくねつて夏井川
キャンブ張る松風涼し新舞子
ハイキング山肌匂ふほととぎす
雨餘の靄疎林に罩めて夏の中

夏書餘墨

武石光聖

蝙蝠や暮色集めて光る水
手につきし鎖の錆や岩清水
夏野原石肌に滋き露なりし
水蜘蛛のこる蘆間や青嵐
花桐に山の夜放れ静かなり

沙羅双樹

赤羽松堂

沙羅の花咲くに住みゐてやすきころ
沙羅の花朝光やゝに照りきたり
さびしさの風は流れき沙羅の花
夕焼けのうすらぎくれば沙羅の散る
沙羅の花その日その日にちるや侘びし
沙羅散りて世に執着のなかりけり

手花火

今野梅檀子

手花火にわが家樂しき夕べ來ぬ
手花火のむしろ暑きに子ら集ひ
手花火に露をむすべる草を見き
手花火に庭いつばいが蒼くぬれ

水 論 渡 邊 武 門

曙のいろ濃くなりぬ松の花
水論や三ヶ月出づる鎌田山
若妻や間をあそれす水盗む
盗みたる水音たてゝつき来る
梅雨寒むや煩かむりしてお百姓

町 の 子 石 橋 柴 子

手花火に母の瞳をおそれざる
釣堀の錢をば秘して母に乞ひ
母と出て櫻桃の實が灯に赤く
母と選りその夏帽子氣に入らず
母に従ひアイスクーキを眠くもち

前 評短壇歌 華 沙 珠 蔓

私は人の歌の批評を書く柄でない。人の作品を論議するひまに、自分の歌を反省し努力をつけたいと思つてゐる。今、編輯子の求めによつて、あわただしく讀後感を書いたりした所で、たいした參考にはならない。言葉が足らなかつたり、違つたことを言つたりして變なことになりはしないかを恐れてゐる。讀み流していただいて差支へない。

○高久曉霞氏 から風

聲城歌壇の宿老である。歌は淡々としてはゐるが、流石に味ふべきものを多分に残してゐる。次ぎの一首をいたゞく。

幼なくて友と吾が經し貧しさの昔語りもたぬしきものを。

○新妻久満夫氏 青鈴の芽

才人の歌である。言葉の美しさからうける餘韻はあるが、それは一面獨りよがりなものの感がないでもない。然し言葉への鋭い感受性

は氏自身の歌をつかんでゐると思ふ。

ヒヤシンスの青立ちの芽のやはらかさ見のかなしさに指を觸りけり。

○松村 清氏 雜五首

調子の整つた作品であるが、それだけにまたあまりに作り馴れてしまつてゐる。

夕づく雨はみぞれ庭木瓜の花びら重く咲きこりたる。

下句が面白いと思ふ。

○柏木 哲氏 熊谷企見子君を悼む

氏は歌壇の流風等を度外視し、一人歌をたのしんでゆく云ふ様な態度を示して居り、それは或る點では心強いものと思ふ。三首目の結句『あはれなり』はなくても充分わかるわけだ。

○佐々木 顯氏 砂埃り

十年一日の如く眞面目に作つてはゐるが、これはたゞ事であらう。事實をうてあつたかも知れぬが、一から十まで言ひつくされては退屈である。散文であつても歌でない。

○高木愛二氏 洪水の朝

第一首、第四首の結句などに多少適切でない技法を感じるのであるが、眞正面から取り組んで、而もこれだけの張りをみせて組みおは

せたあたり、見逃す事の出来ぬ手腕だと思ふ。雀らの聲をあつめて竹やぶの日だまりは朝雲たらしつゝ、

はだら雪ひだに残して峰も尾もぬくとく照れる布引の山

○國玉 喜輝氏 山戀

詩情は豊かであるが、それを充分整理して表現する迄には到らない様だ。

○箱崎 半吾氏 赤切れの手

實生活そのままといふよりも、それを妙に誇張し又はたゞ排へてゐるのではないかとさへ思はれる。

○白木 英尾氏 早春のうた抄

表現のすなはさはいゝが、安易にすぎ、調子がよすぎる。若い女が病臥してゐた處で、このんびり歌ひながされると、何處に悲痛なひびきを感じていゝか、わからなくなる。だが、次の歌は議論もあらうが、好きになれる歌である。

カーネーションの花、あかあかと

しづかなり

若きをんなの死ぬる

一日となる

○高端 鐵氏 山 脈
少し型が古い感じがするとともに、視野の狭
少なることを惜しむ。

○佐藤 清長氏 雅 唱
實感に即し切實な生活をうたふ點は、この作
者の強みである。だが歌にいく分うるほひの
乏しいことは惜しむべきである。

○城 芝鳴氏 靜岡の旅
歌を作るといふ意識が多すぎて、言葉無理
に使つてゐる様子が抜けない。作者はまだ
若い様だ。きどらないで歌ふことである。

○戸部 曙歌氏 夏井川溪谷
整つて明快ではあるが、惜しいことに説明が
勝ちすぎてゐると思ふ。次のうたをよる

○小山田 滋氏 春のころ
一聯十首その淡々たる事に、興趣を味はさ
せる氏には心服する。

○吉田 鐵氏 極 冬
どの歌も一應とれないことはないが、又特別
光つてゐるといふものはない。作者の感情は
或は切實なものだつたかも知れないが。

○美崎 一郎氏 佐渡行
いささかの船酔ひ心地まなかに揺られては
高し佐渡の島山

○野本 多露夫氏 春の青空
一作毎に力こもつた歌を出して、めきめ
きと進境を示してゐる。最も華々しい存在で

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

○五十嵐 博士夫人
病氣静養中のところ、このほど全快。

○佐藤 トヲ氏 (佐藤内郷校長夫人)
六月十五日朝、心臓癱瘓で急逝。行年
五十四。舊時南社客員として岡秀歌人
の名高く「淡雪」のペンネームで「詩
南車」には多数の作品が掲載されてゐる。
眞に哀惜すべし。謹んで弔意を表す。

○戸部 曙歌氏
六月上旬、東京ベルベット株式會社へ
入社す。在厚原戸越町居住。

○中西 一路氏 (碧女教諭)
帝展出陳のため築港工事中の小山田港
に畫材をとり制作中

時雨雲たもてる映のさむけさに岩むらもみ
じ燃えしづまりぬ

○吉田 鐵氏 極 冬
どの歌も一應とれないことはないが、又特別
光つてゐるといふものはない。作者の感情は
或は切實なものだつたかも知れないが。

○美崎 一郎氏 佐渡行
いささかの船酔ひ心地まなかに揺られては
高し佐渡の島山

○野本 多露夫氏 春の青空
一作毎に力こもつた歌を出して、めきめ
きと進境を示してゐる。最も華々しい存在で

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

○五十嵐 博士夫人
病氣静養中のところ、このほど全快。

○佐藤 トヲ氏 (佐藤内郷校長夫人)
六月十五日朝、心臓癱瘓で急逝。行年
五十四。舊時南社客員として岡秀歌人
の名高く「淡雪」のペンネームで「詩
南車」には多数の作品が掲載されてゐる。
眞に哀惜すべし。謹んで弔意を表す。

○戸部 曙歌氏
六月上旬、東京ベルベット株式會社へ
入社す。在厚原戸越町居住。

○中西 一路氏 (碧女教諭)
帝展出陳のため築港工事中の小山田港
に畫材をとり制作中

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

○五十嵐 博士夫人
病氣静養中のところ、このほど全快。

○佐藤 トヲ氏 (佐藤内郷校長夫人)
六月十五日朝、心臓癱瘓で急逝。行年
五十四。舊時南社客員として岡秀歌人
の名高く「淡雪」のペンネームで「詩
南車」には多数の作品が掲載されてゐる。
眞に哀惜すべし。謹んで弔意を表す。

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

○五十嵐 博士夫人
病氣静養中のところ、このほど全快。

○佐藤 トヲ氏 (佐藤内郷校長夫人)
六月十五日朝、心臓癱瘓で急逝。行年
五十四。舊時南社客員として岡秀歌人
の名高く「淡雪」のペンネームで「詩
南車」には多数の作品が掲載されてゐる。
眞に哀惜すべし。謹んで弔意を表す。

○戸部 曙歌氏
六月上旬、東京ベルベット株式會社へ
入社す。在厚原戸越町居住。

○中西 一路氏 (碧女教諭)
帝展出陳のため築港工事中の小山田港
に畫材をとり制作中

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

○五十嵐 博士夫人
病氣静養中のところ、このほど全快。

○佐藤 トヲ氏 (佐藤内郷校長夫人)
六月十五日朝、心臓癱瘓で急逝。行年
五十四。舊時南社客員として岡秀歌人
の名高く「淡雪」のペンネームで「詩
南車」には多数の作品が掲載されてゐる。
眞に哀惜すべし。謹んで弔意を表す。

○戸部 曙歌氏
六月上旬、東京ベルベット株式會社へ
入社す。在厚原戸越町居住。

○中西 一路氏 (碧女教諭)
帝展出陳のため築港工事中の小山田港
に畫材をとり制作中

○小山田 滋氏 (八山探案事務次長)
湯本町議員選挙に立候補し最高票で榮
冠を獲得。尚、今度潮音社より日本歌
人協會員に推薦される。

○高端 鐵氏 (高野中の湯主人)
箕輪村會議員に當選。

○新妻 久福氏 (碧女教諭)
七月下旬より健康を害し平市舊城跡の
自宅で専心静養中。

尾をふりてせきれい一つ静かなる鬼瓦の上
の春の青空
丘の上の麥の立穂に今朝ことにいぎよひき
たる遠潮の音
第一首、殊に愛唱すべし。たゞ一つ「た
りたり」。「ゆらゆら」。「ひらひら」の如き
形容詞が目立つて多い。あながち悪いわけ
でないが、一考する要があらうと思ふ。
○小山田 滋氏 春のころ
一聯十首その淡々たる事に、興趣を味はさ
せる氏には心服する。
いつしらすつくりし軒の蜂の巣と思ひやる
さへ心うるはふ
梅の花咲く日となりていくたりか季節坑夫
のかへりゆく驛
吹く風にゆらく牡丹の大輪を心ゆたかにみ
る日となりぬ。
こう云ふ處に氏の片影が見られて、しつく
りとくる。私はいゝ歌はいゝと簡単にすませ
てしまふが、いゝ歌は全からくる感覚の快
さで、どこがいゝと云はれてもいゝない。ま
づい感想書はなほさららない。結局する處
最も大きな感動は、氏の題材をこなしでゆく
手胸にあると思ふ。

！へ山！へ海

—はさ快輕の服夏—

市平 市平

○うふ・うふ・うふ
同人高端鐵君、居村箕輪村議に最高票で
當選したが、文字通りの蕭正選挙で演説會
はおろか推薦状も出さず立看板も立てず、
たつた二十通の手紙を出したに過ぎなかつ
た。そして曰く
清く強く戦ひかぬ兜の緒いよ、締むべ
し夏は来むかふ
なるほど、世の中にはこんな當選者も一人
ぐらゐあつてもいい。選挙費用、たつた壹
圓幾らとは！
○
小名濱の佐川和弘君、待てどくらせど原
稿を書いてくれない。業を煮やした連中が
酒一升で膝詰め談判しても、その時ばかり
の生返事で、頼りないことオビタマシイ。
そのうち、呑むほどに、酔ふほどに、和弘
君だん／＼氣が大きくなつて、
「オレがアグリで儲けたら、野麥の發行
費ぐれえ、みんな持つてやうら、なして
エ、ケチケチすんねえ」
編輯子「和弘さん、金よりも作品だア」

平市制施行紀念
野麥俳句會の記

○海の碧百合吹く山のほごまより
○炎天の菜いそしめて聞志あり
○百合咲いて關の古道なづかしき
○雷迫り風鈴の音冷え来り
○炎天に花舖は日霽を深く垂れ
○百合の香に目ざめ米糞ぬるくあり
○風鈴を見上げて叫ぶ子を抱きぬ
○炎天の軒に八つ手の調葉かな
○風鈴の朝のみどりが窓に外り
○百合の香をもちびく月が昇りけり
○風鈴にけはしき雲の翼ひくる
○百合にはふ草すれの音を聞き愈ふ
○百合匂ふまだきの露が潮に湧けり
○湯被れにけふも風鈴飄いてる
○百合さしてリユクサツクが下りて来し

柴子
消至
欣子
獄男

書 束

同人各位の御骨折のあとを拜し敬服に堪へません。暮島氏在平时時代の「風景」「サッパリズム」等の思出となつたし拜見致しましたその頃一首か二首のせて貰つた「風景」まだ手許に残つてゐる筈です。先は御馳申速度。

○ 大阪市 松崎 英二氏

新平士の誕生を御祝ひ申上ます。多忙中新発刊の「野麥」御送附被下厚く御禮申上ます併て御發展の程祈上げます。先は御禮迄。

○ 東京市 島田 忠夫氏

本日は野麥創刊號を御惠贈下さいまして御厚情忝く謝し奉ります。郷土藝術運動のため何卒御發展を祈上げます。何か資金をやるのにて、東都の歌人の短冊でも集めるやうな場合には、及ばず乍ら御力に添うやうに致させて頂きます。尚歌人協會の月報今後毎月御送り申上げます。諸同人の御健勝を祈上げます。

○ 東京市 高橋 久由氏

「野麥」御惠贈に預り、ありがたうございました。皆々様の素嗜し御發展を心から嬉しう拜見いたしました。ありしその昔がしのびれてたまたまなつたかを覺えました。朗々え出づる「野麥」の飛躍こそ期して待つべきもののあることを確信して居ります。取あへず御禮まで。

野麥だより

戀愛至上主義の持論から書かれたもので、眞に該博麗麗な讀みものです。「一紅點指」の松村氏の切なる友情、袖沼氏に在りたる田舎……の感一層深くなります。新人田村龍子氏の登場は、寂寥なる詩壇への力強いブレイゼントであると思ひます。

○雑誌の編輯經營が、殊にこんな田舎の小都市にあつては、到底安定をゆるされないとは覺悟してゐたものゝ幸ひなるも各方面の理解ある方達の絶大なる御支援をうけておりますので、これは編輯同人の深く感銘してゐるところです。文化的の仕事が、市民一般の關心を喚びおこしてゐる事實は、近ごろ何彼につけて感じられます。

○次號あたりから文化時評のやうなものを書いてみようと思つてお

人の自己満足に過ぎないやうな安易さは私としてとりたくないつまり「文藝雑誌」から一步脱した「文化雑誌」でありたいのが私の念願です。もちろん、それはあくまでも郷土人の手になる郷土雑誌としての範疇から言ふのですが――

○バ切までに原稿が集らないのが一番困ります。こんどは發行が一寸遅れたのもこの爲めですが、次號は九月下旬に出したいと思ひますから、なるべく今八月中に原稿を總めたいのです。それにまた私たちの仕事に對する正しい理解と同情とを持たれる方達の御寄稿もお願いしたいと思つております。

自信のある評論、創作、詩歌など大いに見せて頂きたいと存じます

野麥 第二輯		昭和七年八月十日發行 昭和七年八月十日發行 (頒價貳拾錢)
編輯兼發行人 野木孝雄	東京市豐島區池袋 二丁目九番四地 印刷所 正明舍	福島縣平町四丁目二番 發行所 柴田書店 電話二三四番

次輯原稿繕切 八月末日

伺 御 中 署

社 麥 野

★

★

★

電話

五

三

番

平

市

二

丁

目

中野の洋品

●

●

○

高久病院

診療科目

内科

小兒科

婦人科

外科

耳鼻咽喉科

皮膚病科

花柳病科

レントゲン科

平田市田町

電話一五三

1

2

3

4

5

6

7

8

10

K, KAMAYA

十五嵐產婦人科

(九六三電) 町川新市平

醫學博士

十五嵐雄二

昭和十二年八月十一日
發行本

